

歴史的町並みの形成と住民意識

—千葉県大多喜町を事例に—

岡島 建¹⁾・田所正敏²⁾

1) 本学地理・環境専攻 教授 2) 本学地理・環境専攻 2015年3月卒業

I. はじめに

現代において歴史的町並みは観光資源として一般的なものの一つとなっている。全国各地において歴史的建造物の調査や補修が盛んに行われ、町並みの保存や修景も各地で行われている。国の重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建地区）には今日でも毎年選定が続き2016年度に4ヶ所、2017年度も7月に1ヶ所選定されている。現在も選定を目指している地区は少なくないと思われる。歴史的町並みの保全については国の政策も多様化しており、地方自治体レベルの保存事業も少なくない。

ところで、歴史的町並みの多くは江戸時代およびそれ以前に起源をもつものが多いが、それらは近代化の中で変容したもの、近代化から取り残されたもののほか、近代化に起源をもつものもある。さらに高度経済成長期に変容し失われるなかで取り残された部分をもとに、修景・復元し新たな歴史的景観が創出されたものも多い。

本稿では、まず先行研究を概観し課題を導出した後、千葉県大多喜町を事例に、歴史的町並みの形成過程について述べ、保存の現状とそれに対する住民意識を考察したい。先行研究は、地理学のほか都市工学において膨大な蓄積がある。地理学に関するものについては柏柳(2000)、中尾(2006)、福田ほか(2011)によれば、次の三つに分類されるという。歴史的町並み保存地区における修景の実態などに関する研究、地域振興あるいは観光化のプロセスを解明した研究、町並み保存活動をめぐる住民意識に

関する研究である。その後も研究は蓄積が続いているが、地理学では概ねこの3分類に位置づけられ、地域によって異なる保存活動のあり方や行政・保存団体・住民の相互関係などの研究が深化していると思われる。一方、大山(2009)は、2004年の景観法とそれに連なる文化的景観の制度設定によって歴史的町並み保存や景観保全に転換点が認められるとして、これらに関する様々な分野の研究動向を概観し展望した。ここでは1)景観の保全に関する研究、2)住民意識に関する研究、3)町並みの評価に関する研究、4)観光地形成及び変容・地域振興などに関する研究、5)町並み・景観の“創出”や真正性に関する研究、その他に分類されている。さらに、全国各地の多数の町並み保存地区を対象として景観要素の抽出をする工学系の研究(劉ほか2014)や一般化・類型化を行った研究(大山2005など)もある。

本研究では町並み保存活動が必ずしも強く推進されていないが、歴史的町並みが観光や地域活性化の一つの主要な要素として位置づけられる町において、地理学研究では近年多くの研究事例のある住民意識を考察する。対象となる歴史的町並みの形成過程をとらえるために地域の発展過程から記述する。

II. 千葉県大多喜における歴史的町並みの形成過程

1. 千葉県における歴史的町並み

関東で最初の重伝建地区として1996年に選定された佐原市(現・香取市佐原地区)は、利

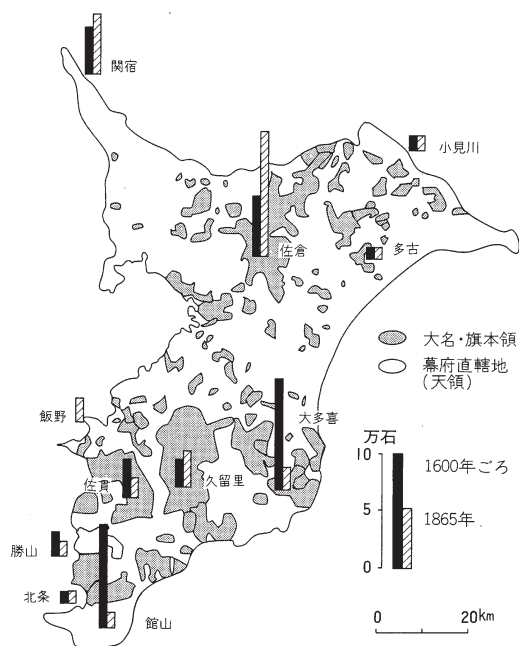


図1 房総における大名領と石高

注) 大名・旗本領は1664年時点のもの。石高の変化は1600年ごろと1865年の数値。

(青野壽郎・尾留川正平編 1967、竹内理三ほか編 1982より作成)

出典：山村 1996

根川水運の川湊と街道による商家の歴史的町並みが保全されている。千葉県では「江戸 町並みの回廊」として、香取市・木更津市・成田市・市川市・鴨川市・野田市・君津市・佐倉市・大多喜町を挙げている(千葉県 HP)。このうち歴史的町並みが残っているところとしては、香取市のほか、成田門前町、市川市中山地区(門前町)、野田市醤油醸造の町、君津市久留里地区(城下町)、佐倉市および大多喜町(ともに城下町)が挙げられよう。図1は現在の千葉県(安房・上総国と下総国の一部)における近世大名領と城下町の分布を示している。主な城下町として佐倉・関宿・大多喜・久留里などがあり、いずれも江戸の近くに配置された譜代大名領である。図2は明治前期の千葉県の中心地を示したものである。東京に近い県西部の諸都市や港町などの交通中心地が近代における中心性を高

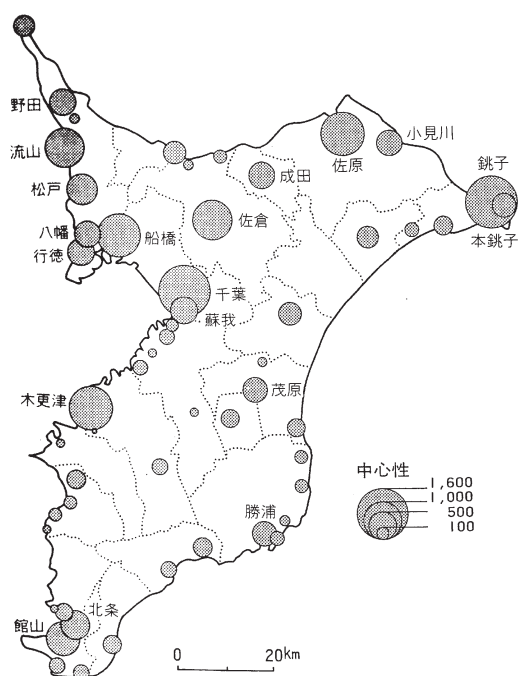


図2 明治前期の千葉県の中心地

注) 1891年の営業税額を指標とした数値を図化。郡界は当時のもの。

(黒崎千晴 1990より作成)

出典：杉浦 1996

めている。内陸の小城下町であった大多喜や久留里は顕著な中心地ではなくなった。

ところで、歴史的町並みのある全国の都市の中には「小京都」や「小江戸」と称して、対外的にアピールしている町がある。全国京都会議を結成している「小京都」に対して、「小江戸」は歴史も浅い。1996年から小江戸サミットを開催している川越・栃木・佐原以外に、大多喜・厚木・掛塚・彦根があるという(松崎 2010)が、その由来や経緯は明らかではない。千葉県内には、北総の小江戸佐原と房総の小江戸大多喜がある。

2. 旧城下町大多喜の変遷過程

1) 近世城下町の形成

図3は1883(明治16)年の迅速測図「大多喜」をベースに、「大多喜絵図」「大多喜城地之絵

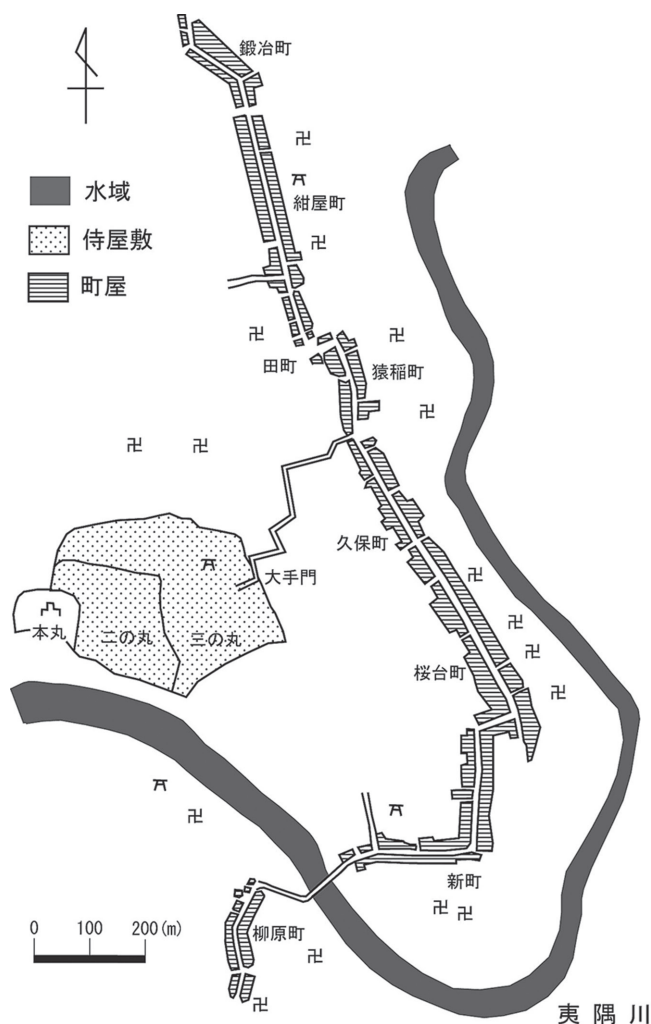


図3 大多喜城下町の地域割り

図」などを参考として近世の大多喜城下町を復元したものである。大多喜城の起源には諸説あり、1521年ごろ真里谷信清によって築城された小田喜城（根古屋城）がはじまりで、図3中の鍛冶町と紺屋町はその城下に位置していたとされてきた（大多喜町史編さん委員会編 1991）が、最近の研究では現在の大多喜城付近に戦国期から城があったという報告もある。また表1は1590年以降の歴代大多喜城主を示したものである。初代となる本多忠勝が大多喜城および城下町を建設した。忠勝は徳川四天王と称され

る家康の重臣であり、大多喜は江戸に近い支配の要として重要視されていた。城郭内に武家地を、中世以来の街道筋に町人地と寺社を配し、夷隅川とその支流を総郭と位置づけられると思われる。

忠勝は、1601年に伊勢国桑名に転封し、その後は二男の忠朝が入封したが、次の政朝が1617年に播磨国龍野へ転封となり、約28年間にわたる本多氏の大多喜支配が終わった。その後も歴代藩主となった大名家は、いずれも譜代大名で、多くが幕閣に名を連ねていたが、藩主が頻

表 1 歴代藩主

		期間	石高	主要役職	前封地	転封地
1	本多忠勝	1590～1601	10	年寄		伊勢・桑名
2	本多忠朝	1601～1615	5			
3	本多政朝	1615～1617	5			播磨・龍野
4	阿部政次	1617～1619	3	のち老中	武蔵・鳩谷	相模・小田原
5	青山忠俊	1623～不明	2	のち老中	武蔵・岩槻	
6	阿部正能	1638～1671	1.5	のち老中		武蔵・忍
7	阿部正春	1671～1702	1.5		武蔵・岩槻	三河・刈谷
8	稲垣重富	1702～1702	2.5	若年寄	三河・刈谷	下野・烏山
9	松平正久	1702～1720	2	若年寄	相模・甘縄	
10	松平正貞	1720～1749	2			
11	松平正温	1749～1767	2			
12	松平正升	1767～1803	2			
13	松平正路	1803～1808	2			
14	松平正敬	1808～1825	2			
15	松平正義	1825～1837	2			
16	松平正和	1837～1862	2			
17	松平正質	1862～1869	2	若年寄		

大多喜町史編さん委員会編 (1991) による

繁に変わり幕府（旗本）領となることもあった。1702年に相模国から入封した松平正久以降は世襲となり明治初年まで続いた。石高は本多忠勝時代が10万石、忠朝・政朝時代も5万石であったが、その後は概ね2万石となる。したがって、城下町も図3に示すような街道筋の町人地と郭内の武家地という単純な形態となったと思われる。本多氏10万石の時代には郭外（三の丸周辺）に武家地があった可能性もある。

中世の城下町には、職人町として鍛冶町と紺屋町があったが、鍛冶町は近世には村方となった。近世城下町の町人地は、中世以来の紺屋町を北端にして、ほぼ南に田町（田丁）、猿稻町、久保町、桜台町と南北に連ね、西に屈折し、新町（新丁）、夷隅川を渡って、柳原町を加えて大多喜7ヶ町の町割りとした。おおよそ南北に通じる町家の街路は、巾7mに及んでいる。その街路の西側には短冊型の屋敷が並び、間口の狭い、奥行き長い屋敷割りとなっている。これが現在の歴史的町並みの原型と言えよ

う。各町の特徴を大多喜町史編さん委員会編（1991）の記載より引用しておく。紺屋町・田町・猿稻町は職人町で、紺屋町は染物職、猿稻町は大工職が多かった。久保町・桜台町・新町・柳原町は商人町で、久保町・新町・猿稻町には3町交替で市を開く六斎市が立ち、桜台町にも六斎市が立った。桜台町と新町は旅籠が多く、花街もあった。

江戸と大多喜を結ぶ街道は、船橋で佐倉道から分かれた房総往還のうち、浜野～長柄山～長南を経由する房総中往還である。城下町に至ると北から入り、町を南北に貫く。参勤交代路としては猿稻町から分かれて大手門に至る。

2）近現代の大多喜町

1871年の廃藩置県とともに大多喜城は廃城となり、城内の建造物はことごとく破壊されてしまったが、夷隅郡役所が猿稻町の大手口付近に設置されたことで、大多喜は郡内政治の中心地となって賑わいを呈した。このころの城下町

の機能は、久保町・桜台町・柳原町においては穀商が中心で、紺屋町・猿稲町北部では鍛冶屋・桶屋・大工などの職人で構成されていて、新町・猿稲町南部では酒造業・醤油醸造業が盛んであった。

1915年に桜台町で大火が発生し、114棟が焼失した。さらに翌年にも桜台で火災が発生し、14棟が焼失した。この2度の火災を「桜台の大火」と呼び、江戸時代以来の町並みは失われたが、町内の防災意識を高めることとなった。なお、小江戸川越が江戸時代の家並みを失った川越大火は1893年のことで、その復興町づくりで造られたのが現在の蔵造りの町並みである。

1930年4月、木原線が開通し、旧大手門近くに大多喜駅が開業した。旧城下町7ヶ町のうち、紺屋町と田町は線路の北側になった。さらに1910年頃から開始されていた民家の天然ガス用井戸の鑿井がいつそう盛んになり、近代化の進展が伺えた。1931年に日本で最初の天然ガス企業である大多喜天然瓦斯株式会社が設立され、1935年には都市ガスの供給も開始された。これにより、大多喜町には多くの企業や研究所が設立されるようになった。しかし、1960年代には天然ガス湧出量の多い茂原を中心とした地域に企業や研究所が移転してしまい、発展に陰りが見え始める。

さらに、1980年代後半、ショッピングセンターの新設、郊外移転が全国的に増えたが、大多喜町では大多喜バイパス沿線に商業施設が立地した結果、食品や衣服を販売する店舗が大きな打撃を受け、減少していった。加えて、人口は戦後の過疎化現象に見舞われて以降減少が続く、特に若年者の流出が顕著で少子高齢化が進行している。これにより、歴史ある住宅や店舗の後継者不足に陥り、今もなお悩みの種となっている。これらのことから、賑わいを見せていた昔ながらの商店街は、閉店による空き店舗化や、目立つ現代的な外観への改装を余儀なくされ、歴史的町並みは大きく変貌してしまった。

Ⅲ. 大多喜における歴史的町並みの保全と住民意識

1. 景観の保全に至るまでの経緯

1975年、城跡に1835年の図面を基に天守が再建され、内部に千葉県立総南博物館（現在の千葉県立中央博物館大多喜城分館）が設置された。1987年国鉄分割民営化に伴うローカル線廃止の動きの中で、国鉄木原線は第三セクターのいすみ鉄道となる。この頃から徐々に観光にも力が入られるようになっていったと考えられる。なお、大多喜町が「房総の小江戸」と称するのがいつからかは不明だが、この観光化におけるキャッチフレーズとして定着したものとみられる。現在、猿稲町・久保町・桜台町・新町（新丁）の町通が歴史的町並みとして残っており、そのうち、国指定文化財1件（渡辺家住宅：久保町）、国登録有形文化財4件（大矢旅館・豊乃鶴酒造・伊勢幸酒店：新丁、六倉商店：大多喜）がある。

景観保全事業の第一歩となったのは、国土交通省住宅局による住環境とまちづくりに関する支援の一つ、「街なみ環境整備事業」の実施地域の募集を行っていることに大多喜町商工会が気づき、町に提案したことである。

街なみ環境整備事業とは、「住環境の整備改善を必要とする区域において、地方公共団体および街づくり協定を結んだ住民が協力して美しい景観の形成、良好な居住環境の整備を行うことを支援する事業」である（街なみ環境整備事業パンフレットより引用）。

この事業を活用している全国の代表的な地区としては、松本市中町地区・お城下町地区・お城東地区・中央東地区、岐阜県飛騨市古川地区、福井県大野市城下町地区、大阪市平野区平野郷地区、神戸市長田区野田北部地区、北九州市八幡西区小屋瀬地区、沖縄県那覇市龍潭通り沿線地区・首里金城地区などがあり、重伝建地区選定を受けている奈良県橿原市今井町地区や

山口県萩市浜崎地区などでも活用されている。2015年現在、全国159地区で実施されている。地域独自の佇まいを今に残す地区や、中心市街地の活力低下による商店街の衰退などが課題となっている地区、地域の景観を積極的に「育てたい、つくりたい」という地区などに対し、活用を勧めており、住宅等の修景整備、電線の地中化、道路の美装化、小公園の整備、景観上重要となる公共施設の整備等に活用し、歴史的な町並みの維持や保全、統一感のある町並みの形成などが可能とされている。千葉県内では重伝建地区の香取市佐原もこの事業を活用しており、当時の大多喜町はまさにこのような地域であったため、それぞれの地域に即した個性的なまちづくりを目的としているこの事業の活用を決めた。さらに大多喜町の実施を参考に活用を決めた市川市中山参道地区もある。

当初、国からは保全範囲の広さについて見直しを要請されたが、旧城下町としての機能をそれぞれ持ってきた地域全体を保全しなければならないという城下町としての誇りから、保全範囲を当初の通りのものとする代わりに、優先的に保全する地区を定めることで合意に至った。また、住民からは個人の家に補助金を使うことについての異論があったが、電線を地中化したり、公園や集会施設などの公共施設を建設することにより、町全体を良くするものと理解してもらうよう要請し、実施される運びとなった。実際に、公共施設として、商い資料館や観光本陣などの観光客向けの施設と、観光客や住民が自由に利用することのできるポケットパークと呼ばれる小公園5ヶ所が設置された。しかしながら、当初予定していた電線の地中化は、予算と工事期間の都合で電力会社と折り合いがつかず、電柱を黒く染めることで妥協する形となってしまった。

行政は、産業振興課商工観光係を景観保全の担当とし、歴史的景観に詳しい有識者と有志の住民を集め、長野県南木曽町妻籠宿や広島県竹

原市竹原地区など全国各地の重伝建地区を回って保全について学び、大多喜町独自の特色あるまちづくりとはなにかを検討していった。そして、住民有志による保全団体である「房総の小江戸大多喜をつくる会」（以下、つくる会）を結成し、行政・有識者・つくる会の三者によって、「町並み景観整備事業」（「大多喜町歴史的景観条例」、「大多喜町歴史的景観条例施行規則」、「大多喜町景観整備事業補助金交付要綱」、「大多喜町景観形成住民団体活動補助金交付要綱」、「大多喜町歴史的景観条例の規定による景観形成基準」の総称：以下、「景観整備事業」とする）を策定し、2000年4月1日に施行した。

事業計画では、図4に示すように、夷隅川といすみ鉄道の線路に囲まれた地区を景観形成地区とし、その地区内に景観計画策定時点に残存していた町屋風の建造物を指定歴史的建造物として、所有者にはその外観の維持を要請した。そして、指定歴史的建造物が多く集中していた、市街地の中心を通る街道筋の町通りを基準に、それに面して建てられている建造物までを景観形成重点地区（以下、「重点地区」）に指定し、その外側を景観形成促進地区（以下、「促進地区」）とし、重点地区にある建造物が優先的に補助を受け、修景することができる。修景費用は、景観形成地区全体で1年間300万円を上限に、およそ1年間で3軒の修景が行われる。

街なみ環境整備事業による国からの補助金の交付期間は10年間であるため、その間は個人の所有物に対して国・町・個人が3分の1ずつ負担していたが、交付が終了した現在では町が3分の2、個人が3分の1を負担している。町の負担がこれまでより大きくなったため、無料だった町営駐車場を有料化し、収益を保全に充てている。

景観整備事業の方針は、地域の住民の理解と協力を得て、城下町としての歴史的な個性を守りながら、町並みを保存、修景しつつ良好な住

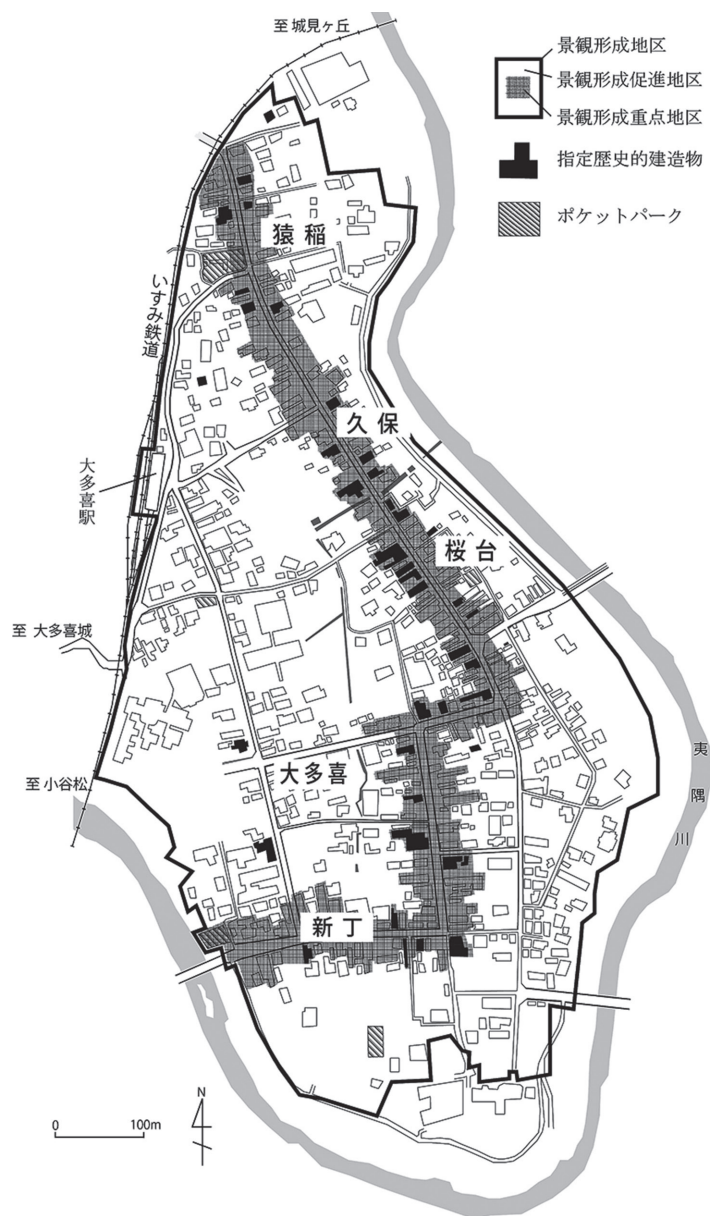


図4 大多喜町景観形成地区全図

環境の整備を図り、地域住民の生活の場として、地域の特性を活かし、経済の発展や文化の向上に寄与するものであるとしている。また、「住民でつくる景観」、「経済活動の振興」、「学習の場としての町並み」の3項に分けて目的が示されている。すなわち、まず、行政・住民・つくる会の関係を密にすること、そして①地域

住民一人ひとりがまちづくりに対する意識を高めてコミュニティーの強化を図ること、②経済活動の振興を景観整備と結びつけて躍動する町並みを形成すること、③町民や来町者および子供達を目で確かめられる学習の場としてのより良い町並みを形成することが、主な方針内容である。

先述の歴史的町並み、すなわち前章まで述べてきた旧城下町のうち、猿稻町・久保町・桜台町・新町（新丁）の4ヶ町が「重点地区」、その周囲の近現代に市街化した部分（大多喜）が「促進地区」となり、城郭と南北の3ヶ町は事業の対象地区外となったことになる。

2. 景観形成地区の住民意識

2014年9月～11月の計11日間、景観形成地区内に居住している住民に対し聞き取り調査を行った。238軒の住宅に調査協力を依頼した結果、50人から有効回答を得ることができた。回答者の属性は、男性18人、女性32人で、年齢別にみると30代3人、40代3人、50代5人、60代10人、70代17人、80代7人、90代2人、無回答3人であり、職業別では自営業12人、公務員4人、会社員1人、パート社員1人、フリーター1人、主婦6人、無職23人、無回答2人であった。居住地は重点地区内36人、促進地区内14人、また指定歴史的建造物所有者13人、非所有者37人であった。

1) 歴史的町並みに対する意識

景観形成地区内に居住している住民は、「大

多喜町の良いところ」として「のんびりしたところ」や「閑静なところ」といった、穏やかで落ち着いた雰囲気あげた住民が多く、町の歴史的な観光資源である「歴史的な町並み」や「大多喜城」をあげた住民は少数であった（表2）。

次に、「歴史的町並みが後世に引き継がれてほしいか」という問いについて「引き継がれてほしい」という回答は「そうは思わない」という回答よりも若干多いとはいえ、歴史的町並みの保全にはならない住民理解が得られているとは言えない状況である（表3）。

存続を望む理由（表4）としては、「町の貴重な観光資源」が最も多く、「美しい景観を残す」、「大多喜の歴史・文化を伝承」はやや少ない。存続を望まない理由（表5）は、「資金を投じてまで残すほどの景観ではない」、「新たに古く見せる必要はない」など、町並みとしての完成度や歴史的価値についての言及が多かった。促進地区の住民からのみあげられた意見では、「思い入れがないから」や「住民の生活を一番に考えてほしいから」であり、町並みに対する関心の低さが表れた。

また、引き継がれてほしいとの回答者に対し、存続に必要なことを問う（表6）と、存続

表2 大多喜町の良いところ (人)

良いところ	重点地区	促進地区	総計
のんびりしたところ	29	5	34
閑静なところ	11	10	21
農産物が豊富に採れること	6	5	11
人情に溢れている	3	2	5
大多喜城	2	2	4
豊かな自然	2	2	4
良いところはない	3	1	4
歴史的な町並み	3	1	4
田舎であること	2	2	4
交通の便が良い	3		3
その他	1		1
無回答	2		2

複数回答可。聞き取り調査より筆者作成。

表3 町並みが引き継がれてほしいか (人)

	重点地区	促進地区	総計
引き継がれてほしい	20	7	27
そうは思わない	13	7	20
無回答	3		3

聞き取り調査より筆者作成。

表4 町並みの存続を望む理由 (人)

存続を求める理由	重点地区	促進地区	総計
町の貴重な観光資源だから	7	1	8
美しい景観を残すのは然るべきことだから	2	2	4
大多喜の歴史・文化を伝承していきたいから	3		3
商店街の維持に繋げるため	2		2
その他	4	1	5
無回答	7	3	10

聞き取り調査より筆者作成。

表5 町並みの存続を望まない理由 (人)

存続を望まない理由	重点地区	促進地区	総計
有名どころと比べて、資金を投じてまで残すほど、良い景観ではないから	4	3	7
昔からあるものは残してほしいが、新たに古く見せる必要はないと思うから	3	1	4
誇れるような町並みになるなら引き継がれてほしいと思う	2	2	4
衰退を止められず、現実的に、残すことは不可能だと思うから	2	1	3
思い入れがないから		3	3
住民の生活を一番に考えてほしいから		2	2
その他	4		4

複数回答可。聞き取り調査より筆者作成。

表6 町並みの存続に必要なこと (人)

必要なこと	重点地区	促進地区	総計
後継者となる若年者の増加	7		7
若年者が保全に関心を持ち、主体となること	4	1	5
歴史や文化を次世代に伝達できる人間・環境づくり	3	1	4
商店街の活性化	3	1	4
空き家を活用したビジネスの展開	3		3
景観保全の担当者が町の歴史と現状を知ること	2	1	3
住民の保全意識を高めること	1	1	2
住民の金銭的な余裕	1	1	2
その他	3		3
無回答	3	1	4

複数回答可。聞き取り調査より筆者作成。

には若年者の存在と推進力が必要不可欠であるとの考えが明らかとなった。また商店街の衰退が招いた景観の乱れや、賑わいがさらに薄れ魅力が失われることによる観光客および人口の減少を懸念していると考えられる。

歴史的町並みに対する住民の評価は高いとはいえない結果となり、重点地区の住民と促進地区の住民を比較すると、特に促進地区内に居住する住民は、町並みに対する評価だけでなく、関心も低いことが明らかである。また町並み存続を望む住民においても、歴史・文化を引き継ぐのではなく、あくまで観光地としての存続を希求しているといえる（表4）。さらに、「歴史や文化を次世代に伝達できる人間・環境づくり」や「住民の保全意識を高める」という意見も少なからずあった（表6）ものの、多くの住民が歴史・文化を次世代に伝えるという役割を担おうとしておらず、町並みの存続を若年者や行政に委ねている現状にあると言える。さらに、行政が町の歴史に関する知識を備えずに保全を行っていることで、町並みを含め、小江戸大多喜の本来の歴史・文化が次第に薄れていってしまう可能性が懸念される。

2) 景観整備事業に関する意識

まず、景観整備事業への賛否を問うたところ、「賛成」が多いものの「反対」もあり、特に促進地区においては「反対」が多数を占めている（表7）。「賛成」の理由としては「観光収入を得て、町を潤すため」、「綺麗な方が住んで

表7 景観整備事業に対する賛否 (人)

	重点地区	促進地区	総計
賛成	25	4	29
反対	6	9	15
無回答	5	1	6

聞き取り調査より筆者作成。

いて快適」が主である（表8）。「反対」の理由を見ると、重点地区の住民は歴史的価値についての指摘が多いのに対し、促進地区の住民は事業が重点地区中心であることや資金が無駄に使われていると感じている（表9）。重点地区では観光で得られた収入が景観整備の資金として運用されていて、目に見える形で快適な住環境の実現に繋がられているのに対し、促進地区ではその収益が活用されておらず、生活の質の改良に繋がられていない現状を、資金の無駄遣いと捉える住民が多く、重点地区を中心とした行政の対応に対する不満が募っていると推察できる。

3. 歴史的町並みの課題と今後の展望

1) 住民が考える理想的小江戸大多喜の在り方

景観整備事業に問題を感じている住民に対し問題点を問うたところ回答は4つに分類できた（表10）。「事業の進行状況や方針と町並みとしての完成度」、「経済的問題とそれに伴う小江戸大多喜らしさの欠落」、「重点地区に偏った資金

表8 景観整備事業に賛成する理由 (人)

賛成理由	重点地区	促進地区	総計
観光収入を得て、町を潤すため	5	1	6
綺麗な方が住んでいて快適だから	4		4
町の魅力を向上させるため	2	1	3
その他	6		6
無回答	10	2	12

複数回答可。聞き取り調査より筆者作成。

表9 景観整備事業に反対する理由

(人)

反対理由	重点地区	促進地区	総計
重点地区以外の地域に目が向けられていないから		4	4
観光収入に期待が持てず、資金を無駄遣いしているように思えるから	1	3	4
価値のあるものは残してほしいが、わざと古く見せる必要はないと思うから	2		2
歴史ある建造物の保存には賛成だが、新たに形成しても歴史的価値がなく賛成できないから	1	1	2
その他	2	1	3

複数回答可。聞き取り調査より筆者作成。

表10 景観整備事業に関する問題点

	人	問題点	重点地区(人)	促進地区(人)	総計(人)
事業の進行状況や方針と町並みとしての完成度	11	修景するなら徹底的にすべきであり、中途半端な町並みになってしまっていること	8	1	9
		保全範囲が広すぎて、整備が追いついていないこと	1	1	2
経済的問題とそれに伴う小江戸大多喜らしさの欠落	9	金銭的余裕がなく、修景しようにもできない住民が多いこと	6	1	7
		店舗においても補助金交付の対象が外装のみであるため、内装だけ現代的な店舗が多く、観光客に不足感を与えていること	2		2
重点地区に偏った資金運用	8	重点地区以外の地域に目が向けられていないこと		4	4
		通りから外れると街灯がなく暗くて危険	1	3	4
事業自体の否定	3	景観整備よりも企業誘致や生活の質の向上に全力で取り組むべき	3		3
—	—	その他	3		3

複数回答可。聞き取り調査より筆者作成。

運用」と、少数ながら事業自体を否定する意見も見られた。

次に、「歴史・文化を活かした観光地として経済発展を目指す行政の方針に問題を感じるか」を問うたところ、問題点は5つに分類でき、「観光地としての不足感と小江戸大多喜らしさの欠落」、「行政の観光に対する取り組みと将来性」、「町並みとしての完成度」について多くあげられ、「立地的問題」や「観光地化自体の否定」は共に3人であった(表11)。

続いて、将来に対する不安について問うたところ、その内容は、「若年者の減少・高齢化の

進行および人口の減少」が最も多く、「商店街の衰退の進行により、買い物できる場所が遠くなってしまったこと」も比較的多い回答であった。しかしながら、「後継者不足による空き家・空き店舗・空き地の増加に伴う景観の乱れ」と回答した住民は少なかった(表12)。その不安を解決するために必要なことを問うと、「働く場の創出・企業誘致」や「若年者の住みやすい環境づくり」が多く見られたが、行政に対する不満がより目立つ結果となった(表13)。

このように景観整備事業や観光地化に対して多くの住民が問題意識を持ち解決策を模索して

表11 観光地化に対する問題点

	人	問題点	人
観光地としての不足感と小江戸大多喜らしさの欠落	18	観光客が出費するところがなく、観光収入に期待が持てないこと	6
		大多喜でしか味わえない物事がないこと	6
		店舗も少なく、土産物もなく、楽しむところもないため、観光客を満足させられないこと	4
		喫茶店等、小休止できるところがないこと	2
行政の観光に対する取り組みと将来性	14	観光に対する行政の意欲を感じないこと	6
		建造物を今後所有していく後継者が不足していて、観光地としての寿命が短いこと	3
		長期的なプランが明示されていないこと	3
		観光客を多く呼び込めるような案が行政から一向に提示されないこと	2
町並みとしての完成度	12	城下町のイメージにそぐわない建造物が多く、町並みが不統一であること	7
		空き家・空き店舗・空き地が増加しており、景観を損ねている点	5
立地的問題	3	交通の便が悪く、観光客が気軽に来られないこと	3
観光地化自体の否定	3	企業誘致や生活の質の向上よりも観光が優先されている点	3
—	—	その他	6

複数回答可。聞き取り調査より筆者作成。

表12 将来に対する不安

不安内容	人
若年者の減少・高齢化の進行および人口の減少	30
商店街の衰退の進行により、買い物できる場所が遠くなってしまったこと	8
後継者不足による空き家・空き店舗・空き地の増加に伴う景観の乱れ	3
福祉が充実していないこと	2
歴史・文化の消失	2
その他	4

複数回答可。聞き取り調査より筆者作成。

表13 不安の解決に必要なこと

解決策	人
働く場の創出・企業誘致	10
若年者の住みやすい環境づくり	9
行政が積極的に動くこと	4
町外からの助言・有能な人材の獲得	3
熱意のある町長の招聘	3
空き家を利活用したビジネスの展開	2

複数回答可。聞き取り調査より筆者作成。

いた。中でも、町並みとしての完成度や小江戸大多喜らしさの欠落、行政の方針や姿勢に対して問題を感じている住民が多いことが明らかとなった。「後世に引き継がれてほしい」との回

答を27人から得ることができた(表3)が、将来への不安と捉えるほど深刻に町並みを意識する住民はごく少数であった。さらに、「歴史・文化の消失」が不安との回答も非常に少数であ

ることからも、多くの住民は小江戸大多喜が「結果的に後世に引き継がれることになれば、それに越したことはない」程度のものと位置づけているのである。加えて、行政の動向に対して問題を感じていることや、「働く場の創出・企業誘致」や「若年者の住みやすい環境づくり」が不安解決の糸口であると考えていること、「住民の保全意識を高める」や「歴史や文化を次世代に伝達できる人間・環境づくり」をあげた住民が少ないことから、多くの住民が小江戸大多喜を自らが主体となって継承していくという意思を抱いておらず、それらの存続を若年者や行政に委ねている現状がより明確となったと言える。

そこで、次に理想的な小江戸大多喜の在り方

を問うたところ、ここでも「若年者の増加」が最も多く見られることから事の深刻さが伝わる結果となっている（表14）。次いで「商店街が賑わいを取り戻すこと」、「観光客が大勢訪れる地域になること」などが多数見られたが、やはり、町並みや歴史・文化に関する回答は少数であった。これらの理想の実現に必要なことを問うと、「住民が主体となってまちづくりに関わること」は少数であり、企業誘致による経済振興と若年者増加の期待や利便性の向上、行政に対する不満、新たなビジネスの展開に関する回答が大多数を占めた（表15）。

以上のことから、多くの住民が小江戸大多喜を独自性のある貴重な歴史・文化としてではなく、単に観光資源として認識していることが明

表14 小江戸大多喜に対する理想

理想	人
若年者の増加	14
商店街が賑わいを取り戻すこと	13
観光客が大勢訪れる地域になること	12
全国に誇れるような町並みになること	5
行政が住民の生活を第一に考えた土地活用を推進すること	3
歴史・文化がいつまでも引き継がれていくこと	3
その他	3

複数回答可。聞き取り調査より筆者作成。

表15 理想の実現に必要なこと

必要なこと	人
働く場の創出・企業誘致	11
若年者の住みやすい環境づくり	5
交通や買い物等、様々な面で利便性の高いまちにすること	4
行政が積極的に動くこと	2
町外からの助言・有能な人材の獲得	2
空き家を利活用した新たなビジネスの展開	2
熱意のある町長の招聘	2
自然や農業を利活用した新たなビジネスの展開	2
住民が主体となってまちづくりに関わること	2
その他	3
無回答	4

複数回答可。聞き取り調査より筆者作成。

らかとなった。さらに、保全、伝承することよりも、若年者の増加や、商店街が賑わいを取り戻すことに理想を抱いており、企業誘致による経済発展こそが最も必要なことと考えられていることから、歴史的町並みを含め、小江戸大多喜は消失の危機にあるといえるだろう。

2) 行政・住民・保全団体と小江戸大多喜の今後について

ここでは、景観形成地区内在住の住民に加え、大多喜町役場産業振興課商工観光係、房総の小江戸大多喜をつくる会に対する聞き取りによって得られた回答から、行政とつくる会が今後どのように小江戸大多喜を保全していくのか、また、行政・住民・つくる会の三者の関係性について考察する。

景観整備事業は、歴史と文化を守り、活かしながら、大多喜らしい個性ある町並み景観をつくっていくものであるが、「施行してから14年が経過し、今日までどの程度達成されているのか」を問うたところ、「数字を示すことはできない」という。なぜならば、この事業は到達点や目標を定めておらず、さらには前項(表11)にて「長期的なプランが明示されていないこと」を住民が問題視していたように、実際にそれが存在していないのである。このような事業には住民理解や企業理解が必要不可欠であるが、歴史と文化を守ることを前提としているにも関わらず、事業の担当者が町の歴史に関する知識を備えていないことや、長期的なプランが存在しないことを鑑みれば、現段階では住民理解や企業理解を得るのは難しいだろう。

つくる会は、景観整備事業の計画段階から施行直後にかけて忙しく活動していた。しかし、ここ何年もの間、会自体は存続しているが実質的な活動はしておらず、住民を交えた三者での話し合いも行われていない。現在、事業は行政のみが動かしている状態で、年に3軒ほどの住居あるいは店舗の修景を機械的に行っているに

すぎないと言っても過言ではない。

また、住民理解を得るどころか、前述のように多くの住民が行政に対して不満を抱いているのが現状である。行政としても、こうした不満を募らせないよう、住民のアイデアや意見等を間接的かつ簡易的に聞くことができる「町長への手紙」というシステムを取り入れている。しかし、このシステム自体にも住民は問題を感じている。なぜならば、「手紙」として届けることは出来ても、その内容がどう処理されたかが住民に届かないのである。60代の女性は「お願いが棄却されたらそれは仕方ないことだが、棄却された理由どころか、棄却されたかどうかすら分からない。」と述べ、より不信感を増強させてしまう結果となっている。したがって、行政・住民・つくる会の三者の関係性は極めて希薄であると言える。

ここまで、多くの住民が今後の小江戸大多喜を若年者や行政に委ねていると述べてきたが、少数ながら保全に熱意を持った住民も存在しているのは事実である。例えば、60代男性は、「次世代に継承する責任が私たちにはある」と、古い書物や写真をデジタル化し、フラッシュメモリに保存することで、色あせることなく永く歴史を残そうとしたり、大多喜の歴史を手軽に伝えられるように、詳細に歴史が綴られている文献を分かりやすく読みやすく編集して冊子にし、それを読んだ住民が歴史を知り、後世に伝えやすい環境をつくったりしている。ある女性(年齢未回答)は、廃校となる小学校の教室を利用して、若い住民や観光客向けに、体験学習の開講や、空き家・空き店舗等を利用した喫茶店の開設などを発案しているほか、名産のタケノコを使った土産品の開発も行っている。他にも、小江戸大多喜の存続や小江戸大多喜らしさの創出のために、尽力したりアイデアを生み出したりしている住民は少なからず存在している。こうした住民の努力やアイデアに対して反応が届けられないまま時が流れてしまえば、保

全に熱意を持った住民が減っていつてしまい、町を動かすような革新的な出来事が起こらずに、小江戸大多喜は消失してしまうかもしれない。

小江戸大多喜の存続のためには、住民理解や企業理解を得ることを急ぐ前に、まずは行政が歴史を認識し、その上で景観整備事業や観光地化に対する青写真を作ることが必要だろう。また、住民からの意見やアイデアに対してしっかりと回答し信頼を得なければ、三者が協力し合わなければ成り立たないような事業を成功させることは難しいと言える。行政が主体となって事業を進めているからこそ、視野を広く持ち、町全体の住民に不利益さを感じさせないようにまちづくりの可能性もあるのではないだろうか。

IV. おわりに

本稿では「小江戸大多喜」という旧城下町の町並みの保全とそれに対する住民意識を明らかにすることを目的とした。まず、小江戸大多喜とは何かということを明らかにするために、町の変遷過程を検討した。確かに近世には江戸に近い重要な藩の一つであったが、近代以降城郭が失われた後は街道筋の町屋が町の中心街として引き継がれ、現在の歴史的町並みとなっている。こうした歴史・文化を守り、活かして、「小江戸大多喜」と称し景観保全を行ってきた。しかしながら、数件の指定・登録文化財以外は歴史的価値が小さい建造物が多いことや町並みが不統一であることから、住民は小江戸大多喜に魅力を感じていないことが明らかとなった。住民は、あくまで観光資源として「結果的に後世に引き継がれることになれば、それに越したことはない」とものと考えており、そして、これらの伝承を若年者や行政に委ねているのである。さらに、保全・伝承よりも若年者の増加

や商店街の活性化を将来への理想とし、企業誘致による経済発展を最も必要としていることから、住民にとっての小江戸大多喜は残念ながら消失の危機にあるといえる。

本稿は田所正敏の卒業論文『歴史的町並みの保全と住民意識－千葉県大多喜町を事例に－』（2014年度国土館大学文学部卒業論文）をもとに、岡島が前半部を加筆修正し、全体を再構成したものである。なお、作図において大学院生の藤岡英之さんにご協力いただいた。

文献

- 大多喜町史編さん委員会編 1991. 『大多喜町史』 大多喜町.
- 大山琢央 2005. 重要伝統的建造物群保存地区の立地に関する考察. 史学論叢 35, 21-40
- 大山琢央 2009. 歴史的町並み保存に関する研究動向. 史学論叢 39, 50- 64.
- 柏柳敦子 2000. 歴史的町並み保存における地理学的研究について. 駒澤大学大学院地理学研究28 : 31-35.
- 杉浦和義 1996. 都市（千葉県の人口・集落）. 千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史. 別編：地誌1. 総論』 千葉県.
- 中尾千明 2006. 歴史的町並み保存地区における住民意識-福島県下郷町大内宿を事例に-. 歴史地理学48 (1) : 18-34.
- 福田 綾・大道寺聡・吉原 遼 2011. 須坂市における歴史的町並みの形成と展開. 地域研究年報 (33), 157-176.
- 松崎憲三編 2010. 『小京都と小江戸』 岩田書院.
- 山村順次 1996. 千葉県の歴史的背景. 千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史. 別編：地誌1. 総論』 千葉県.
- 劉 澤・趙 世晨・王 大強 2014. 伝統的建造物群保存地区とその周辺地区の空間的關係に関する研究. 都市・建築学研究（九州大学大学院人間環境学研究院紀要 (26), 1-8.
- 「江戸 町並みの回廊」 <https://www.pref.chiba.lg.jp/kkbunka/b-shigen/edo/machinami.html>